
しばらく寝る

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しばらく寝る

【Nコード】

N1389J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

博と慎二は、とある日の朝、落ち合う約束をしていた。そんな二人の日常の風景。文学寄りの短編小説。

それは、朝の出来事だった。彼は、クリーム色のセーターの上に羽織り、下にはデニムのジーンパンを履いていた。

彼の靴底は、てらてらと、水に濡れて輝いていた。今朝、雨が降った際にできたのか、水たまりがマンホールの横の小さな窪みの中にあっただ。

彼は、公園の中の、細い道の上に立っていた。左右には芝生の丘が隆起していて、この芝生の地面も、今朝の雨によって水分を含んでいる。

彼の立っている道は、煉瓦のタイルを敷き詰めた地面でできていて、くねくねと芝生の間を曲がりくねりながら、奥へと続いていた。ふと、その奥の道から、ひとつの人影が現われ、彼の元へと走り寄ってきた。

やがて現れたのは、一人の青年だった。青年の着るコートには、毛皮が帽子の周りや、首元についており、下にはデニムのジーンズをはいている。

「よう」

近づいてきた青年が、彼に向かって言った。彼は、

「博」

とつぶやいて、二歩、青年へと近寄る。

一瞬無言で見つめ合った後、青年が、コートのポケットに両手を差し込んで、

「行くか」

とつぶやいた。

彼はうなずいて、二人は並んで歩きだす。

公園は人影が彼らのほかにはまったくなく、静かだった。薄暗い青色の空の下、二人の話す声は、公園内に木霊するように響いた。

しばらく歩いた後、ふと、道の先から、犬を引き連れたおじいさ

んが、歩いてきた。

二人はほぼ同時に、おじいさんに向けて頭を下げた。

おじいさんは、通り過ぎる二人に向って笑い、その下で犬は、何の関係もなさそうに芝生の地面へ鼻先を突き付けて嗅ぎまわっている。

おじいさんの横を通り過ぎた後、数歩歩いたところで、彼——博が後ろへ振り返った。

「どうした？」

青年——慎二が同じように、後ろに振り返る。

「いや」

と博はおじいさんの方を見ながらつぶやいて、そして再び前を向いた。

慎二も無言で、前に向き直る。

二人は、その後、無言で公園を後にし、横断歩道を渡って、近くのコンビニへと入った。

その頃には、空はだいぶ明るくなり始め、日の光が、薄暗かった公園内を浮き上がらせた。

コンビニの中で、二人はしばらく、各自自由に歩き回り、博はコンビニ弁当とカップラーメンをひとつずつ手に持って、慎二に近寄った。

慎二は、雑誌コーナーで立ち読みをしていたが、博が近づいてくると、

「あ、俺も買わなくちゃ」

と気づいたようにお弁当のコーナーへと向かっていった。

二人は、それぞれレジを済ませてから、コンビニを出た。

二人は話し合った末、博のマンションで一緒に朝食を取ることにした。

博の住むマンションは、公園の入り口のすぐ近くにあり、二人は再び公園に入って、元来た道を引き返し、そして、マンションへと歩いた。

二人は、マンションに入ると、エレベーターに乗り、四階へと着いた。エレベーターの扉が開くと、ちょうどその時、四階の通路の奥にある部屋のドアを、先ほど公園で会ったおじいさんが開いて、犬を中に入れていた。

二人はエレベーターを出ながら、じつと無言で、おじいさんが家に入るのを見つめていたが、おじいさんが家の中に入ると、ふと顔を見合せて笑った。

そうして、おじいさんの入っていったドアの隣のドアの前までくると、博がジーンズのポケットから鍵を取り出して、それをドアに差し込み、中へ入った。

博の部屋は、2LDKで、畳の部屋が一つあり、博はそこを寝室としていた。もう一部屋はキッチンのある部屋で、彼はそこをリビングとして、テレビ、テーブル、ソファを並べていた。

博は、キッチンの上の棚からグラスを出して、それをテーブルに二つ置く。そして、冷蔵庫を開き、その前にかがんで中をのぞいた。小さな冷蔵庫だった。

「オレンジジュース」

そうつぶやいて、博は中からオレンジ色のジュースのパックを取り出して、テーブルの上のグラスへとなみなみと注いだ。

「はいどうぞ」

そう言って、博はオレンジジュースが満杯に注がれたグラスを、慎二の前へと滑らせて置いた。

慎二は無言でそのグラスに顔を近づけて、唇をグラスに付け、満杯に注がれたオレンジジュースを飲み、その量を通常の量へと減らした。

慎二はグラスから顔を離すと、「サンキュ」とつぶやいた。

博は、慎二と向き合うようにして、ソファに座った。

二人はそれぞれ、自分の買ってきたものを袋から取り出して、テーブルに並べた。

慎二は、おにぎりを三つ買ってきていた。ひとつは鮭、もう一つはシーチキン、最後の一つは銀しゃりだった。

博は、カップ麺と弁当だった。

博はソファから立ち上がり、キッチンにあった白いポットの前に、カップ麺を置いた。そうして、蓋を開けて、半分ほど開いた状態にし、開いた隙間へ向けて、ポットでお湯を注いだ。

博は、無言でカップ麺の箱を手で掴み、テーブルへとゆっくりと移した。慎二はすでにおにぎりの包みを開けて、食べ始めていた。

博はソファへと座りなおすと、慎二の買ってきていたおにぎりの一つを手にとって、そこに書かれた字を眺めた。

「銀しゃりってさ」

博はつぶやいた。

「何にも中身のない、ただのおにぎりだろ？」

そう言って、博は顔を上げて、ちらりと慎二の顔を見る。

「……ああ。うまいぞ」

慎二はそう、視線を上げて博を見ながら言った。

すると、博はじつと手元の銀しゃりのおにぎりを見つめた。

「半分食っていいぞ」

慎二は今度は視線を上げずに、食べながらそうつぶやいた。

すると、博は、

「ラジャー」

とつぶやいて、そのおにぎりの包みの、赤い線の入った突起を掴んだ。そうして、その突起を引くと、びりびりと包みが半分に破けて、博は海苔を白飯に巻きながら、包みを取った。

そうして、おにぎりの両端を掴み、指でそれを半分にし、片方を破いた包みの上に置くと、もう片方を、自分の口に持っている、かぶりついた。

「どうだ？」

慎二がつぶやいた。

「おいしい」

博は、どこかくぐもった声を口の中から発しながら、銀しゃりのおにぎりを食べた。

そうして博がおにぎりを食べ終わった時、テーブルに置いてあった携帯電話が、音楽を鳴らし始めた。

おにぎりを頬張っていた慎二が顔を上げて、博が携帯電話を取る様子を見つめる。

すると、博は、携帯電話の電源ボタンを押して、その音楽を止めた。そうして、

「アラームが鳴っただけだ」

と言って、博は再び携帯電話を置いた。

「そうか」

慎二はそう言って、頬張っていたおにぎりを、包みの上にひとまづ置いて、グラスに手を伸ばし、そこに入っていたわずかなオレンジジュースをすべて飲み干した。

慎二はそれから、テーブルから身を引いて、ソファに体を深く沈みこませた。そして、口を開く。

「そういうば、さっきのおじいさん、隣の部屋に住んでた人だったんだな」

「ああ。そうだ。最初見た時、どっかで見た顔だと思ったんだよな」
「なるほど。あの時、じっと見てたのはそのためか」

慎二はそう言うとき、手をテーブルへ伸ばして、グラスを取った。

そして、それを口元まで持っていき、口を付けた。

二人は朝食を食べつくした。すると、博がごみをひとまとめにしてごみ箱へ入れ、そのあとに、ソファにごろんと仰向けに寝た。慎二も同じように、反対側のソファに仰向けに寝転がる。

二人はじつと無言で天井を見つめていたが、博がふと口を開いた。
「しばらく、寝るか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1389j/>

しばらく寝る

2011年10月5日02時42分発行